

・学校の概要(平成15年4月現在)

| | | | | | | | | | | |
|-------------|----|----|----|----|----|----|------|-----|-----|--|
| 都留市立禾生第一小学校 | | | | | | | | | | |
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 | |
| 学級数 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 13 | | |
| 児童数 | 69 | 70 | 57 | 48 | 50 | 60 | 3 | 357 | 19 | |

・実践研究の概要

1. 主題(テーマ)

確かな学力を身に付け主体的、創造的に生きる児童の育成

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年算数(子ども達の理解度の差が大きく、発展的な学習や補充的な学習に対し、子ども達の実態に応じた教材が工夫しやすい教科であるため。また全学年の年間時数も比較的多く確保されており、多くの研究実践が可能でデータが収集しやすいため。)

(2) 年次計画

平成16年度の計画は、現段階の計画を載せてあります。今後の研究の中で、変更する可能性もあります。また載せてある内容はあくまでその年の中心研究であり、1年次の内容も3年間継続研究し、随時改善していく予定です。また2年次、3年次の内容でも研究に欠かせない部分は1年次から必要に応じ進めております。

平成十四年度

テーマ

「確かな学力」を育むための指導方法の研究(算数科をとおして)

仮説

小学校の算数科において、子どもたち一人一人に応じた学習教材とその支援方法を工夫した学習を行えば、児童の基礎・基本は定着し学力は高まるであろう。

研究内容・方法

<内容> **学力のとらえ方、基礎・基本を定着させる指導方法及び教材の開発、授業の実践。**

(本校としての学力のとらえ方、基礎・基本を定着させるための個に応じた教材開発・学習形態の研究を中心に行う。)

<方法>

全体研究で総括的な理論研究の共通理解を深め、研究の方向性を確認する。
児童の実態調査等に基づき、課題を探る。

(標準学力検査の実施による本校児童の実態把握・保護者アンケートによる親の願いや考え方の把握)

効果的な発展教材・補充教材の開発実践、学習形態、指導方法等の研究を各学年ブロックごとに行う。

- 1年間の内に最低3単元以上の教材開発及びその実践
- 1学期・・・TT(2人)での指導+教材開発
 - 2学期・・・少人数指導(学年3~4クラス)+教材開発
 - 3学期・・・**保護者授業参観での公開授業**
(全学年少人数学習による授業公開)

学習指導案・教材を作成する。

授業実践を行う。

全学級(または学年)で実施し、全員で見合い深める 機会の設置。

各学年(又は学級)1回の研究授業
授業観察や授業の反省等を含めたデータを収集する。

| | | |
|---|---|-----|
| 事前：レディネステストの結果によるグループ作り 中：座席表の活用・机間巡視 事後：振り返りカード，児童の感想，テストの実施 | } | 比較等 |
|---|---|-----|

データを分析し，検証する。

研究のまとめをする。

同時に機能別研究として，以下の部会を設け研究を進めた。

- 1) 学力部会・・・学力のとらえ方を中心に研究
- 2) 評価部会・・・授業後の振り返りカード等の作成
- 3) 教材開発部会・・・算数領域に適した指導形態の研究
授業以外での基礎・基本の定着方法について
- 4) 人材活用・情報発信部会・・・外部指導者の発掘・ホームページの作成

テーマ

- 基礎・基本の定着を図り，確かな学力をはぐくむ少人数学習の研究 -

仮説

算数科において，習熟度を中心とした少人数学習を実施し，子どもたち一人一人に応じた学習教材とその指導・支援方法を工夫した学習を行い，子どもたちが自ら考え表現する場を積極的に設定していけば，児童の基礎・基本は定着し学力は高まるであろう。

研究内容・方法

<内容>

- ・算数科での少人数学習 = 主に習熟度別学習による授業実践の発展(児童の個に応じた補充・発展教材の開発)
- ・少人数学習での積極的な考える場・表現の場の設定(基礎・基本のさらなる定着のために)
- ・地域近隣学校への活動の啓発

<方法>

児童実態調査・保護者アンケートによる検証及び課題把握。

(学力標準検査の実施による本校児童の実態把握・保護者アンケートによる親の願いや考え方の把握・・・共に1年次との比較)
効果的な発展教材・補充教材の開発実践，学習形態，指導方法等の研究を各学年ブロックごとに行う。

- 1年間の内に最低3単元以上の教材開発及びその実践
- 1学期・・・習熟度別少人数学習での指導＋教材開発
 - 2学期・・・習熟度別少人数学習での指導＋教材開発
 - 10年目研修者への授業提供・・・約20名参加
 - 近隣地域の学校への中間発表会・・・約200名参加
 - 保護者への授業提供
 - 3学期・・・保護者授業参観での公開授業
(全学年少人数学習による授業 算数以外も実施)

学習指導案・教材の作成。授業実践を行う＝学年(又は学級)1回の研究授業
授業観察や授業の反省等を含めたデータの収集
データ分析と研究のまとめ

機能別研究としては，昨年の研究に加え以下の内容を主に研究した。

- 1) 学力部会・・・学力と表現の関連
- 2) 評価部会・・・評価規準の授業での生かし方・振り返りカード修正
- 3) 教材開発部会・・・授業以外での基礎・基本の定着方法について
- 4) 人材活用・情報発信部会・・・ホームページによる情報発信

テーマ

評価を生かした学習指導のあり方

仮説

学習評価を工夫し，一人一人に応じた学習を行えば，児童の基礎・基本は一層定着し，学力は高まるであろう。

研究内容・方法

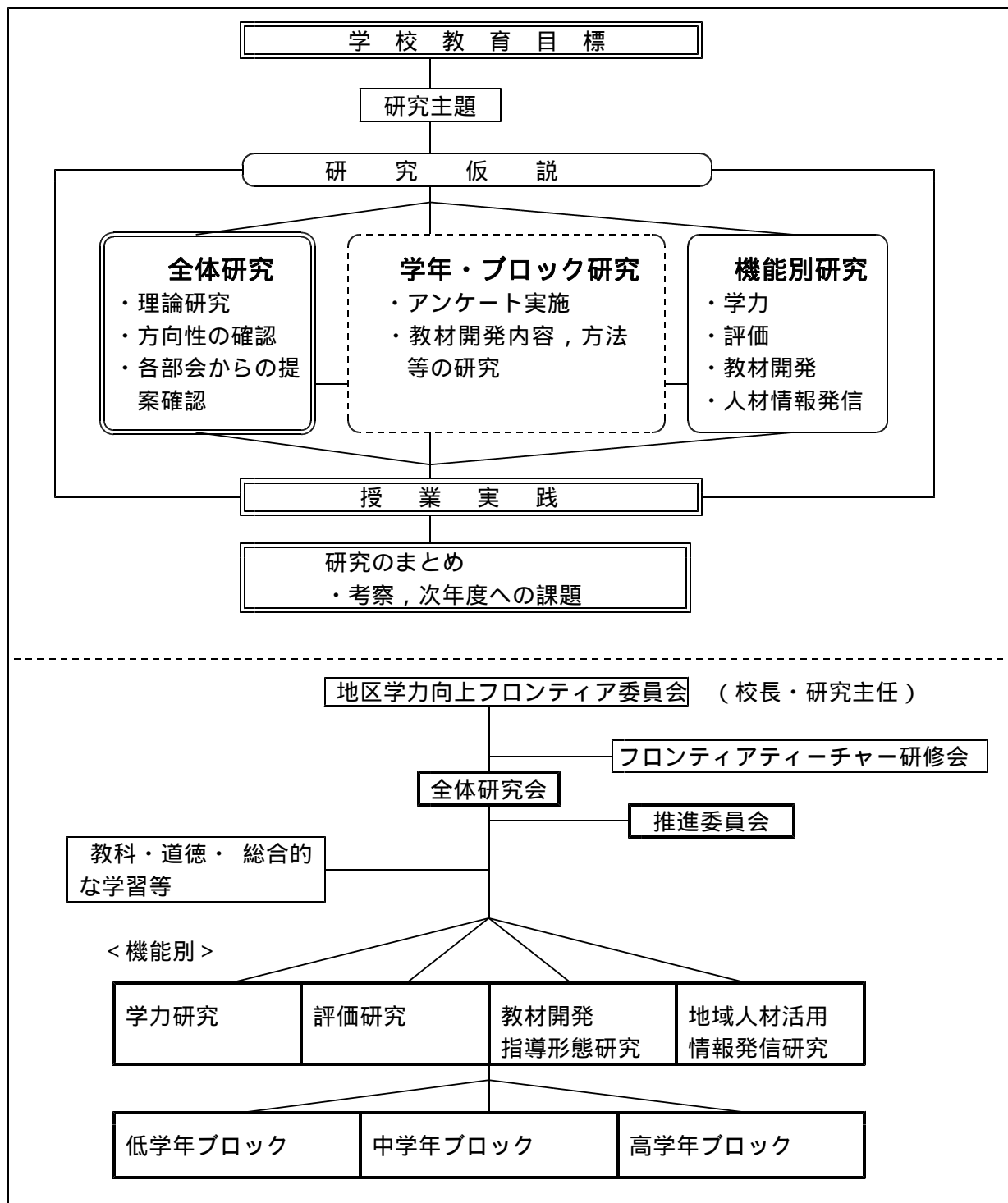
<内容>

- ・評価規準を，より具体的に各授業の中で効果的に活用できるように研究する。
- ・15年度研究の継続・実践
- ・研究成果の公開
- ・三年間の研究のまとめ

<方法>

- ・基本的には前年度までの継続研究のため，二年間の研究方法と同様に取り組む予定
- ・標準学力テスト等の実施と比較検討による，研究方向の修正
- ・外部講師等による共働指導等

(2) 研究体制及び組織



平成15年度の成果及び課題 成果

1. 学力向上に確かな成果 (学習面)



<習熟度学習 (少人数学習) の面から>

子ども：楽しく授業。実態に応じ授業。差別という意識がなく定着。

関心・意欲の高まり。理解の深まり。教師とのかかわり時間の増加。
教師：実態に即した手立てや教材の開発。より子どもにかかわる時間の確保。
より個に応じたきめ細かな指導や授業の改善。

<表現の面から>

学習指導要領が目指す「生きる力」や、本校が目指す「学力」という面からも、発表を含めた表現する力を高めていくことが、本当の意味での学力向上に繋がっている。また表現を意識することで、子どもの思考力や発表する力を育てることになり、学習を深めることにも通じていた。

<子どもの変化の面から>

学習内容の理解が高まることはもちろんだが、それ以上に、**関心・意欲といった情意面での向上が大きい**ことが本校の大きな成果といえる。習熟度別学習を行えば行うほど、その傾向が高まり生き生きと活動する子ども達の姿が見えてきた。学力低下問題以上に学習への意欲の低下が深刻な問題とされてきている今日、情意面の進歩・向上は何よりまして大きな成果である。

これには全学年で取り組んだ**習熟度学習**により、子どもが**自分にあった学習コース**を選択できたことが大きく関係していると考えられる。自分にあった学習を選ぶことで、子ども達が**やればできるという自信**を持ち、また苦手意識をもっていた子ども達も**「わかる・できる」を体験**することで**「学ぶ楽しさ」を知り、結果として意欲の向上や関心の高まり、算数好きへとつながってきている。**

<10分間計算の面から>

計算スキルの面で計算力のアップがあった。また集中して取り組み定着してきた。

2. 学習以外の部分での成果



職員の一丸となった取り組みによる研究の高まり

・授業改善，児童理解への一層の努力

保護者の研究に対する理解の深まり

機能別研究部会の質的高まり

学力部会：本校としての学力定義の確立

保護者アンケートによる2年間の比較検証

評価部会：算数到達度検査の結果考察による本校児童の実態把握

評価規準の生かし方の基本確立

教材開発：10分間計算定着化のための工夫改善

学年間の関連付け，資料ファイルの作成，プリントボックスの設置

情報発信：ホームページ完成による情報の発信

開かれた学校へ・・・職員の名刺・名札作成

課題

<習熟度学習（少人数学習）に関することから>

- ・指導案，教材，プリント選びなど各コースごとの差をどうつけていくか。
- ・同じコースの中でも個人差が生ずる。そこをできるだけ縮めるための指導の手立て
- ・機能別部会の内容をどのように実践に生かしていくのか。
- ・習熟度学習以外の授業への生かし方。等が考えられる。
- ・授業を作り合うという観点からブロック研究をより有効に活用する。
- ・指導・支援者の負担軽減。

<表現という面から>

- ・表現を取り入れた授業 = 計算能力だけでなく考える力，表現（発表）する力を高める取組を継続的に行っていき，より効果をあげること。

<評価の面から>

- ・評価の生かし方，工夫
- ・習熟度別学習をより効果的にするために，自己評価力の定着

．学力把握のための学校としての取組

継続的な標準学力検査の実施（年1回・・・5月頃実施）
 振り返りカード及び評価ファイルを利用し，個人のデータの収集と保存

．フロンティアスクールとしての研究成果の普及
 保護者対象として

- 1) 学校だよりでの活動状況の報告（随時）
- 2) HPによる情報発信（随時）
- 3) 全家庭を対象とした保護者アンケートの実施
- 4) 少人数学習の発表・・・5年（6月），2年（11月）
- 5) 全学年少人数学習発表・・・全学年（2月19日，20日，23日）
- 6) 保護者へ研究成果等の説明会（2月）

近隣地域教職員対象として

- 1) HPによる情報発信（2003年7月開設）
- 2) 10年目研修教員への授業提供
- 3) 中間発表会の開催（2003.11.26実施）
 3年・5年生による研究授業，講演会，研究会
- 4) 2003年度研究紀要の作成及び配布（2004年3月）

次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数体制 T.Tによる指導
 一部教科担任制（家庭科） その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無